

第二部 各地の文化を活かす

真田の歴史を活かした街づくり

はじめに

皆さん、こんにちは。(拍手)

ライトが煌々と照っております、しかも前の方には何かいかにも権威のありそうな人たちが多く集まっておりますので、小心者の私はどきどきし、何をしゃべったらいいいのかよくわからなくなっております。

私は今日、午前中から松代の町を歩かせていただきました。その際に感じたのは、皆さんが真田氏を本当に好きなんだなあということでした。なぜあんなに多くの人が真田氏に対して特別な思いを持つのか、本当はこれを中心に議論したいのですが、求められた講演題目からするとそうもいきませんので、今日は主として街づくりって何だろう、真田氏は歴史上に何をしたんだろうということに触れて、講演とさせていただきますと思います。

今回のテーマは「歴史を語り、伝える」——おもてなしの心づくり——ですが、おもてなしという場合、私たちの心持ちが問題になります。つまり、おもてなしをする側がどういう気持ちをお客様に対して抱くかということです。「歴史を語り、伝える」というテーマを前提にするなら、おもてなし



真田サミットでの子ども勝ち鬨太鼓

をする側がどのくらい歴史をふまえて、お客様に接するかに課題があると思いますので、その点について触れていきましよう。

真田氏を通してまちおこしをするということは、基本的に人を通してまちおこしをすることです。すなわち、まちおこしは人おこしにつながるはずです。きちんとした人をいかにして養成していくか、このことにも少し触れてみたいと思います。

ちなみに、持ち時間はわずか四〇分ですので、私の専門とする戦国時代の歴史には触れられないことに気がつきました。このたびの講演のため、私はほとんどのエネルギーを戦国時代の史料から真田氏の歴史を明らかにしようと、レジユメづくりに費やしたのですが、今日はこれに触れることができません。ですから、これからは資料なしでいいことだけいつて帰るといふ、とんでもない講演になりますけれども、よろしくお願いいたします。

一、真田氏の動きの特徴

それでは、戦国時代から近世を通じて真田氏の動きはどういうところに特徴があるのかから、お話をさせていただきます。

私は武田信玄の研究をしています。研究上の過去の人物だからということもありまして、「信玄」と呼び捨てにします。山梨県では私のように武田信玄、武田信玄というと、すぐ年配の方から「信玄公といえ」と苦情を受けるのですが、研究者としては、いちいちそういうこともできませんので、ここでもすべて真田氏、あるいは当主を呼び捨てにさせていただきます。なお、皆さんのお考えと違う点があるかも知れませんが、その点も研究を通じてということでお許しください。

真田氏の全体的な動きを見ても、当主が先を見る目を持っていたということですが、またもう一度後でも触れなおりますが、戦国時代以前の真田氏は、地域の皆さんがお考えになるほどの大きな勢力を持った家ではありませんでした。真田氏が大きく飛躍するのは、幸隆が武田信玄と結びついてからです。逆にいいますと、幸隆は武田信玄と結びつけば、家が繁栄する可能性があるということを考えていたからこそ、信玄と結びついたので、幸隆の先を見る目が優れていたのです。

そういうふうには真田氏が伸びる大きな契機になった武田氏との関係でしたが、武田氏滅亡直前、真田氏はあつという間に北条氏に連絡をとって、武田氏を裏切っています。これ以降の混乱の中でも同様に真田氏は主君を次々に変えていきました。戦国を通じて真田氏ほどコロコロと主君を変えている家はありません。これも真田氏が、時代の先を見ながら行動していたことを示すのではないかと思えます。

ややもすれば地元の皆さんは、真田氏に対する思い入れがあるあまり、こういうことをいうと怒ら

れるのですけれども、時代を見ながら主君を変えていくことは、真田氏が生き延びるための手段でした。その意味で真田氏の行動、真田氏がとった手法、それは自分たちの家、自分たちの領地を守るためにいかにして時の権力者と結びついたらいいか、ということを一に考えてのことでした。

真田氏は幸隆の時代に信州をいったん離れていますが、もし武田信玄と結びつかなかつたならば、信州に戻らなかつた可能性もあります。おそらく上州で逃げていた非常に苦しい段階に、どういうふうにしたら生きていけるか、誰が次の時代を担っていけるかということを見ながら、未来を考えていたのではないのでしょうか。

これはそのまま、必ずしも恵まれた環境にいる人が、そのまますくすくと育って立派な人になる、というわけではないことにつながります。現在、社会は市町村合併をはじめとして、きわめて困難な時期にあります。次の時代の姿もよく見えてきません。こういう状況はまさに戦国時代と同じです。この困難な時期だからこそ、先を見る目を持つ、これが真田氏から私たちが最初学ばべき点だと思います。

その次に、真田氏の方策の一つは、まわりの人々からよく学習していることです。

武田信玄の統治方法を見事に受け継いでいるのは、真田氏です。武田信玄は戦国大名の中でももっとも進んだ統治方法をとっていました。御当地は川中島合戦の舞台になった場所で、信玄より謙信の方が人気がありますが、上杉謙信と武田信玄を比較した場合、戦争の仕方は上杉謙信の方が上だと

私には思われます。しかし領域統治、人をどういうふうに治めていくかという技能においては、武田信玄の方が優れていたようです。その技法を見事に学んでいたのが真田氏だったと私は考えています。武田氏と真田氏が結びついた初期の段階では、真田氏はそれほど自分の領地を持っておりませんでしたので、幸隆の子どもたちが武田信玄の側近として活躍しました。武田信玄の側近ですから、信玄から直接、彼の技法・統治理念を習得することができました。

もう一つ注目すべき点があります。それは真田氏が国境に領域を有したという事実です。武田氏滅亡の時に真田氏が生き延びることができたのも、信州だけでなく上州にも勢力を持っていたからでした。国境は人間の交流に際して自然の障壁となる山や川によって形成されていますから、実際にも攻めにくいのです。その上、現在でもそうですけれども、行政と行政の狭間にある場所は、双方の行政・権力が手出しをしにくいのです。

真田氏は上州と信州の境目に勢力を持っていました。これは一見すると不利なことのように見えますが、そのおかげで武田氏滅亡のおりにうまく逃げのびることができたのです。つまり、真田氏は自分の置かれた立場を認識しながら、まわりを非常にじっくり見る能力を持っていたのではないかと思います。

今、この困難な世の中だからこそ、私たちはもう一度まわりを見る必要があります。

真田氏の場合は、それはそのまま、まわりだけでなくて、自分が住む地域の地理をよく知っている



真田町にある真田氏居館跡

ということでした。どう考えても真田氏の戦法はゲリラ戦です。敵に対して正面からぶつかっていくことは得意ではありませんでした。ゲリラ戦を展開するには、いかにして敵の本隊とまともにぶつからないで済むかが重要なのですが、それを理解していたのが真田氏でした。

先ほど述べましたように、真田氏の場合には信州と上州と両方に領地を持っていました。ということは、力が二つに分断されるはずなのに、逆にそのマイナスをうまく利用して、何かあったら一方に逃げ込み、時を経たらもう一方を使う、こういう方法をとっています。地域、地勢をよく知ることは、

いつの時代でも大事なのです。

今回のサミットでいいますと、各市町村においては、自分たちの市町村の立地条件をどのように理解するのか、マイナスと想っているものをいかにプラスに転化していくか、これもまた真田氏の歴史から学ぶべき点ではないでしょうか。

真田氏のもう一つの特徴は、人のつながりを見事に利用していることです。武田氏と結びついた初期の頃、次々に戦果をあげていますが、その戦果のほとんどは血縁、地縁を利用して、人とのつながりで相手方を攻め落とす戦法によっています。まじめに戦争するというよりも、裏から工作をして、相手方に降参しますと手をあげさせています。こ

これは今の世の中にとっても一番重要な点だと思えます。ややもすれば、戦いという武器を持つていかにして戦うかが問題にされるのですけれども、武器を持たないで戦う、武器を使わないで相手を降参させることが大切です。その時に一番大事になってくるのは人の力、他人との信頼関係になります。そういう人のつながりを持てるのか、どういう家臣たちを育てていくのか、展望がなくてはなりません。そういう意味で、真田氏が歴史の中で行ってきたことの一つ一つが、私たちの手本になっていくと思えます。

それから真田氏は独立性、独自性を常に維持していました。先ほどもいいましたが、真田氏がたまま生き延びたのは、武田氏の重臣として武田権力の中で重要な位置を持ちながら、上州に勢力を持っていたからでした。信州ではなくて上州だったことが重要です。それはどういうことかといいますが、上州は武田氏にとって最前線でした。常に上杉氏や北条氏などと戦わなければいけない戦線だったのです。武田氏は甲府から遠いこの地において臨機応変に対応できるように、また独自に戦争ができるように、真田氏に軍団を動かしてもよいと許可していました。もしこれが甲州や信州でしたならば、いつ真田氏に裏切られて武田氏が攻めこまれるかわかりませんが、それぞれの独立した領主たちが勝手に軍団を動かせるようにはしなかつたはずで、最前線の場所、換言するならば、真田氏はいつ攻められるかわからない危ない場所にいたから、武田氏滅亡の時にも独自の軍事力を維持して、即座に対応することができたのです。これはそのまま武田氏の重要な家臣でありながら、武

田氏とある程度距離を置くことができた、真田氏生き残りの原因にもなった、ということですが。

私たちももう一度この辺で、地域の独立性を維持するとはいったいどういうことか、これを考えていく必要があります。それはそのまま、今に至るまで真田氏がこんなに好かれている理由は何だろう、ということにつながります。先ほど市内を歩いていてもいろいろ説明を受けたのですが、皆さんが真田氏を今も思い続けているのは、昔の領民に対して、真田氏がきつといいことをやっていたからなんですね。最終的に地域で領主を守ってくれるのは領民です。その意味では、地域を治める者が市民の目線にどれだけ立てるか、行政は市民の側に立ってどれだけのことをするかが後世の評価を決定づけると思います。これは市町村が今後に生き延びていく、もつとも重要な点ではないでしょうか。

以上は真田氏がいろいろな手段をとりながら、家を残す努力をしてきたことにつながっています。先ほどのたとえでいうなら、市町村をいかに維持していくかと同じです。ただし、現代の家と戦国時代の家とは家の制度が違います。おそらく真田氏の時期には、血縁、血の関係をいかにして残していくかが最大の課題で、家臣や領民よりもこちらの方が重視されたはずです。今の私たちにあって、家あるいは市町村を残すことはいったいどういう意味を持つか、家人や市町村民の側からもう一度考えてみる必要があります。

おそらく多くの人が共感している真田氏の良さは、あの変幻自在な戦争の仕方、それから大坂の陣における散り際のよさ、こういった点ではないでしょうか。これは私たちが日常生活において、意思

をそのまま通すことがなかなかできない、あるいは義理人情を重んじるといいながら、なかなかそれを実行できないからこそ、それを通した者に思慕を抱くのではないかと思えます。ということは、私たち一人一人がもう一度人間としてどういう意思を持って生きていったらいいのか、あるいは私たちが他人に信用されるって何だろう、こういうことを考えねばなりません。

私が研究対象としているのは戦国時代です。よその県からおいでの方々が会場にたくさんおいでですので申し上げますと、長野県には「信濃の国」という歌があります。「信濃の国」では四人の歴史上の人物がうたわれています。最初に出てくるのが木曾義仲きそよなかです。その次が仁科五郎盛信にこなです。そして太宰春台だざいしゅんたい、そして御当地の佐久間象山さくまぞうざん、これだけの人が登場致します。

ところで、それぞれの地域の英雄を考えてみたら、どうなるでしょうか。おそらく日本全国の圧倒的に多くの地域で、皆さんにとって地域の英雄は誰ですかと聞きますと、戦国時代の人が出てくるのではないのでしょうか。現在、奈良や京都が栄えているのは、戦国時代より前において信濃を含めて全国各地からいろんな富や人足を集め、奈良や京都で消費したからです。ところが戦国時代になりますと、地域で地域から生み出された富が使われるようになりました。私の生まれました山梨県の場合でいいますと、武田信虎・信玄の時代になって、はじめて大きな城下町ができました。つまり甲斐の富が地域で使われるようになったのです。松代の場合、海津城かいつじょう（後の松代城）ができることによって、周辺の富が海津城とその周辺で使われるようになりました。



松代城

長野県の歴史の中に出てくる「信濃の国」でうたわれている人たちは、信州人であるか否か微妙な問題があります。最初にうたわれた木曾義仲の場合、江戸時代以前、木曾はまだ信州ではありませんでした。正式には美濃の国なんですね。しかも彼は木曾で生まれた人でもありません。ですから「信濃の国」でうたうべきではない人も知れないです。でも、現代の木曾郡で育ったからいいんだということになりますと、戦時中に疎開で来ている人も長野県人だ、別荘を長野県に持っている人も長野県人だということになり、私ども長野県は日本の圧倒的多くの人を育てていることになってきます。

次に仁科五郎盛信という人物は、武田信玄の息子で、武田勝頼かつよりの

弟です。戦国時代の人が地域の英雄にされるといふことにつながってきます。その後に出てくる二人は江戸時代の人です。佐久間象山が出てくることは、松代の人たちの地域に対する誇りになるのではないかと思います。

ともかく、もう一度私たちは、なぜ真田氏が好かれるのか、なぜ真田氏でなければいけないのかを考えていく必要があると思います。

二、街づくりは過去を知り、人をつくること

真田氏の歴史ばかりを述べていくわけにはいきませんので、いいたいことを主張していきます。大変失礼ですけども、私は本サミットの趣旨がよくわかっていなくて、好き勝手なことをレジュメに書いてきましたので、私はこんなふうに思っているということでも話をさせてください。

観光って何でしょうか、いろいろと見るべきものを用意すれば、観光客は来てくれるものなのでしょうか。私は住民が「自分たちの住んでいるところはいいとこらだよね」といえないようなところに、観光客が来るわけがないと思っています。地域住民の誇りがない場所に、観光客は絶対に集まりません。同じ県、同じ市の住民がやってくることもないような場所に、県外の人はずりやってくるきません。長野市民がいつばいこの松代を訪れないようでは、県外の人はずりやってくるわけがありません。それは、まず住んでいる人たちが、「松代っていいよね、本当にこないとこないよね」っていえるかいいえなにか、だと思おうのです。

住民がいいと思うような街にしていけない限り、よそから人が見にくるわけがありません。とするならば、観光の主人公は住んでいる人たちです。各地域で今、観光のために巨大な資金が投入されています。過日、ある人から聞いた話によれば、ここ数年来、日本全体では観光客の数は決して減ってはいないんだそうです。ところが各地で、観光客が来なくなつたと耳にすることが多くなりました。聞いてみたら、理由がわかるんですね。実は統計に出ている観光客の中には、ドイツ・ニールランド等に



梅翁院の干し柿

行く人も含まれているんだそうです。ドイツ・ニールランドなどの大規模レジャーランドはもう圧倒的な一人勝ちですよ。そうすると、それ以外の場所に、どういう人が行くかが問題です。近ごろ観光客の数が極端に減少しているのは、バスを連ねて会社ごと旅行するような大きな温泉地などです。個人が自分のお金で、個人的レベルで旅行を楽しむようになった時の観光施設っていったい何だろう、今までのようなお金の投下の仕方では本当によいのだろうか、こういうことを少し考えてみなければなりません。

皆さんはどういう場所、観光地へ旅行に行きますか。旅行に行く時、普通は日常生活をそのまま持っていくことをしないはずですね。私たちの日常生活とちよつと違うところ、たとえば毎日仕事に疲れているから、少しほつとしたいなとか、家の窓から見える景色とは違う風景を見てみたいとか、せつかくだから美味しいものを食べてみたいとか、こういった目的ではないでしょうか。

何よりも私たちはいったいどこから来て、どこへ行くんだろう、そうだ、自分を確認するために他地域の文化を見てみたい、こういった理由で旅に出るのではないのでしょうか。

今いったような魅力がないところに、観光客は来なくなりつつあ

ります。もう温泉だけで人が来る、あるいはカラオケや遊具が用意されているだけで人が来るという時代は終わりました。むしろ、今は人が人としていかにいやされるかという時代になってきています。地域住民が主人公であり、文化がいやしになるとなれば、松代の皆さんにとつて自分が行きたいと思うところが、松代の中にはいっぱいあるはずです。自分たちが行きたいと思うような場所をふるさとでまず発見し、あるいは足りなければ創作していけばいいわけです。自分たちが本当にいいと思う場所だったならば、外の人に向かって、「松代はいいですよ」といえます。自分たちが本当にいいと思わなかったら、心からいえません。相手はそれを見抜きます。自分たちが本当に素晴らしいと思うところは、間違いなく口コミでうわさが広がっていきます。そうなれば、わざわざ宣伝をしなくても人はやってきます。

皆さんはいわゆる観光地へ行って、「これは金もうけが見え見えだよ」と感じた経験はありませんか。そういう観光地へは二度と行きませんよね。何もなかったけど、ここは本当に気持ちよかったですよ、といえる場所には再び訪れたいですよ。そういった意味で、私たちはもう一度、観光つて何だろうと考えないといけないのです。その時に財産になってくるのは文化財です。

私たちは過去の文化の上に生きていますので、よその地域の文化を見たくありません。文化財というのはすべて歴史の産物で、私たちの過去を象徴しているからです。

ところで、松代の場合もたくさん文化財がありますけれども、各地で文化財は困るといふ話を耳に



松代の路地

します。私は今、長野県の文化財保護審議会の会長をしておりますが、「文化財っていうのは守るのに困るよね」という話をよく聞かれます。これはとんでもないことです。私たちが文化財を指定するのは、勉強するのにこんないいものないですよという、そういう題目をつけているだけだ、と私は思っています。学ぶための、皆さんが豊かになるための、手段・教材をいかにして後世に伝えていくか、そのために文化財は指定されているわけです。つまり、文化財が松代にどれだけあっても、地元 皆さんが学ばなかったならば、文化財としての意味はないのです。ふるさとを学ぶ材料が文化財で

す。その背後の方に、「学んだ結果、こんなにいいんだ、この地域は」「私たちの歴史の今はここにあるんだ」ということが見つかったならば、他の人に知らせたくなるはずですね。知らせたくなったら、口コミで伝わっていけばいいわけで、そこに観光の芽が出てくる。つまり観光は学びの次のステップになると思います。

今回、改めて松代を見ていいなと思ったのは路地です。まだ、松代にはちよつとひなびた路地がありますよね。あれはとてもいい文化財です。私はまだこちらでしっかりした食事をしたことがないのですが、松代でないと食べられないものは何でしょうか。おもてなしの心って、食事に現れることが多いのですが、一般の観光客には

主人としては出してやりたくないものもあるんですよ。特別な人、特別な時には、走りまわって食材を集めてご馳走しますよね。私はお祭りの時しか食べないようなものを出してもらえらるぐらいに、人の関係をつくりたいなあと思っています。松代ではお祭りの時、どんなものを食べているでしょうか、食事もまた文化です。

各地に急激に人口が増えて都市化している場所があります。そういった地域は、残念ながら文化財を持っておりません。過去の文化、過去の遺産というのは、いくらお金をかけても急激にはつくれないものです。文化財は未来に向けての財産であると同時に、過去の先人たちから私たちがもらった宝です。そういった意味では、もう一度、文化財を資源として使っているかどうか、みんなを考えていかなくてはなりません。

皆さんは文化財から本当に学んでいますか、松代の良さをどれだけ学んでいますか、子どもたちに松代はいいところだつてどれだけいいついていますか、これを少しお考えいただきたいのです。観光施設にいくらお金をかけても、都会にどんなにお金を積んでも、地方のいい風景、いい空気、過去の歴史、これにはかかないません。それはそのまま、この松代に生まれた皆さんが、松代にどれだけ誇りを持っているかということにつながってきます。

今日、松代を歩かせていただいて、松代の人たちはみんなふるさとに自信を持っていることがよくわかりました。過疎化が進んでいるようなところへ行くと、自分たちのふるさとに対して自信を失っ



松代ウォーク

ています。自分たち、住んでいる人たちが「ここはいいとこだよ、すばらしいところだよ」と教育もしないで置いて、子どもたちがふるさとをすばらしい場所だと思おうわけがありません。

松代の人たちは松代に自信を持っていると思うのですが、その自信はどうやって伝えられますか。今日、ボランティアの皆さんの話を聞いて思ったのは、よく松代のことを知っているな、ということ。ここにお集まりの皆さんは、あの人たちと同じようにふるさとをどれだけ語れますか。よく考えてみますと、各地の教育ではふるさとのことを教えておりません。私は長野市の状況がわ

かりませんが、松代の子どもたちは松代の歴史をどれだけ教わっているのでしょうか。ふるさとの歴史を知らなくて、ふるさとの自信を持つというのは無理ですよね。各市町村の理事の皆さんも、ふるさとの歴史を子どもたちにどれだけ伝えていくか、教育をいかにしていくか、これは重要なことだと思えますので、しっかりお考えください。

ふるさとのことを教えないのも当たり前の話ですよね。私が奉職する信州大学でも、松代の歴史はまず受験問題として出しません。出すのは日本の大きな京都や東京の歴史ばかりです。でも本当にそれだけが知識なのでしょう。そういう意味では、もう一度、地域が地域として生きていくために重要なことをいくつか考えていかねばなり

ません。ちょうど今、義務教育では総合学習の授業が始まっています。総合学習をするにあたって、ふるさとのことを子どもだけでなく、私たちもお互いに学んでいきませんか。

その際にですね、こんなふうにいったら怒られるかも知れませんが、松代の皆さんにも、それからよその人たちにも私はいいたいのですが、どうもだんだん人間の志が低くなってきているようです。たとえば日本の政治家を見ると、過日の国政選挙でもそうですが、この地域を良くするという話ばかりですね。私は国政に参加する人たちには、日本の一〇〇年後をこうするということを主張して欲しい、地域のことを見つめてでも日本全体を良くして欲しいものです。県は長野県の一〇〇年はこうあるべきだという理想を示して欲しい。ややもすると、松代の皆さんも長野市から、あるいは県からこれだけお金をとってこようという話をするのですが、その前に自分たちは我慢してでもいいから、長野市全体をどうやったら良くできるのか考えて欲しいのです。

文化財の維持にはお金がかかりますが、それでも歴史の重み、未来の教科書として大事だから保護費、保存費を公おおやけが支出しているのです。これは目前の経費ではなく、つまり心の豊かさにつながる経費だと思えます。このような政治に対する見識を、もう一度、文化財とともに考えていく必要があるのではないのでしょうか。

そうすると、子どもたちにもふるさとの文化を教えるという教育のプレゼントは、建物をつくるよりずっと重要なはずです。教育は住んでいる人たちに自信を与えます。私たちは未来を信じております



善光寺の御開帳

ので、未来を創っていく子供たちのために、ぜひ地域の教育をしていって欲しいのです。ここにお集まりの市町村では、真田氏を通じて地域を知る運動を展開してくれたら幸いです。

おわりに

長野市民の皆さんは、長野市のことをどれだけ知っていますか。たとえば、松代は一〇万石の大城下町です。一〇万石というのは私が住んでいる松本から見れば、四万石も大きいんですよ。ところで、この町は日本の中でもきわめて珍しい場所です。一〇万石の大都市が今、市になっていないというきわめて稀有な例なのです。江戸時代、町でもなかった村でしかなかった善光寺に、長野県を中心に奪

われました。長野オリンピックというの基本的には善光寺を中心とした宗教の文化が、松代の武家文化を乗り越えた象徴だと思います。

政治の中心地であった松代は、政治・戦争の拠点としての松代城を持っていました。ところが善光寺は宗教、文化の世界だったわけです。いつの間にか政治は精神文化に負けてしまいました。もっと極端な言い方をしますと、善光寺は最初からお客さんが来ることを前提につくられた

町です。お客が来なかつたならば善光寺およびその門前町は成り立ちません。日本全国から人を集める場所です。それに対して城下町松代はまったく違う場所でした。松代藩の中心となる政治都市ですから、日本全国から人に来てもらう必要はありません。せいぜい領民が来ればいいのです。ですから敷居が高くてもいい場所だったわけです。人が入りにくい場所だったから、今でもこんなに古い文化が残っているのです。

これまで松代の住民は、相当やせ我慢をしてきたと思うんですよ。やせ我慢の結果、私たちはこんなにいい文化を維持することができました。よそが持つていない財源がいっぱいあります。こうなつたら、もつともつとやせ我慢しませんか。城は消えました。政治の中心地としての意味は消えました。けれども、残された景観、人の心などは残っています。おそらくお城、政治的な中心地、こういったものはいつの日かつぶれていきます。また、建物その他は維持も大変です。しかし、文化は違います。長野市の場合、善光寺と宗教施設は日本全国の庶民が支えました。お城は城主に仕えた武士が支えました。庶民が支えた地域や文化は現在も残っています。庶民の支えた善光寺町・長野市が政治都市・松代を飲み込んでしまいました。

けれども、今ここにはお殿様のいる世界、武士たちのいる世界でない松代が残っているわけですから、住民の側で新たな自分たちを主人公とした文化の城下町をつくっていくことが最善だと考えます。松代の住民はみんな、他力本願でなくて、自ら独自の文化をつくっていきましょう。

考えてみると、長野市と一口にいつても、長野市には多様な文化があります。善光寺、松代はその代表にすぎません。これから松代は人を育てようとしています。歴史を語り伝える人の育成が、松代の皆さんの今後に課せられた課題になります。

去年の共同宣言を見ながら、私はこんなふうに考えました。共同宣言では、「真田氏の歴史ロマンを後世に継承し人々の活力とします」とあります。だとしたら、すべての市町村で歴史を伝えることのできる人をつくらねばなりません。松代はすごいですよ、ポランティアの皆さんの動きを見ていると、歴史を伝える人たちをつくっていることがよくわかります。皆さんの市町村では、真田氏や地域文化を語れる人がどれだけいますか、どれだけそうした人をつくっていますか。もう一度、人材育成を考えましょう。

大麥申し上げにくいのですが、今日お集まりの市町村長さんたちは、いうならば博物館という館長さんなのです。館長さんは博物館のすべてのことを知ることが大前提になります。これまでの状況や、これからのシンポジウムからして、おそらく各市町村長さんたちは真田氏やふるさとの歴史をよく知っていることと思えますけれども、館長さんですから、展示物、市町村の誇りをもっと宣伝しましょう。

地域に住んでいる人たちは、市町村長さんたちよりもっと地域のことを知りましょう、そして語れるようにしましょう。ロマンあふれるといいますが、語らなければロマンはあふれてきません。「真

田氏の歴史ロマンをまちづくり、人づくりに活かし、心のかよいあう温かいまちを築きます」とも宣言されています。そうなんです。このためには、みんなが学ばなければいけません。学ぶというのは知識だけの問題ではありません。今日一緒に歩かせてもらってよくわかったのは、私よりはるかに松代の知識を持った人がたくさんいることでした。お寺の歴史などを非常によく知っている人がいます。でも、知っているだけでは価値がないんです。その知識をどういうふうに活かして、次の時代をつくっていくか、これが重要です。未来をつくるために過去を知るのであって、知ればそれでいいんだという考え方はもうやめましょう。未来づくりのための知識はどうやってつくっていったらいいのか、再考察しなければいけません。

「私は真田のことがよくわからないので、早目に行きたい」と真田宝物館の学芸員の原田和彦さんに申し上げたところ、原田さんの方から、「ぜひ来てください、当日こんなことをやっています」と、松代を見て歩くコース、いくつかのパンフレット、それから要点を記した書類を送ってきてくれました。その時の手紙に、「ボランティアの皆さんは私の宝です」と書いてありました。そうですよね、地域のことを語れる人たち、これは宝です。学芸員が人の大事さを認識していること自体が素晴らしいことです。これからまちづくりは文化財や、人がリードする時代になります。その際、皆さんの市町村では本当に人と文化、これにお金をかけているでしょうか。またかけてもらっているでしょうか。松代には素敵なボランティアがいっぱいいます。



長国寺

ボランティアを養成するというのは、一見すると楽なように見えますが、立ち上げるまでが大変なことです。立ち上げてしまっただけではもったいないです。どこかの場所がいったん成功すると、それをまねしようと多くの市町村がしますが、人や文化は地域ごとに差があります。ボランティアの皆さんがいる背後にどれだけ努力があるか、これを考えていただきたいものです。

『ボランティアガイドのすすめ松代見て歩き』という本を、松代のボランティアの皆さんが作っています。これはなかなかいい本です。地元の皆さんが、私たちはこれをよその人に伝えたいという気になれば、こんな本までができるんですよ。この本を作っている私たちは、松代に対して大変な自信を持っています。未来の文化を創っていく基盤は、こういう動きではないかと思っています。

最後に、「真田氏ゆかりの地域間における信頼関係を築き、相互解のもと人的、物的交流の促進を図ります」とあります。今やまさにこういう交流関係がないと、地域が良くなっていきません。お互いの情報を交換しながら、共に伸びていかなければなりません。ただ、注意して欲しいことは、市町村はすべて景観も歴史も違うという事です。ややもすれば、どこかで成功すると、それをまねしようとしてしまいます。でも二番煎じで成功した例はありません。地域の多様

性、文化の多様性をまずは認識しないとどうにもなりません。私たちが真田氏から学んだのは、地域の独自性をどれだけ学びうるか、そしてそれをどれだけ主張しうるかだと思います。

私たちは文化財というと、ややもすれば古いことばかりだと思えます。でも私はもう違うと考えます。文化は創っていくものです。どんなすばらしい文化も、誰かが始めました。各地で指定されている、たとえば樹木一本とっても、多くの物は最初に根づき、育っていききました。今、私たちのまわりを見ていると、四〇〇年後に向かつて、四〇〇年後に国に指定されるような文化を創っていくという志がないように感じられます。それぞれの地域で、もうこの辺で、未来に向かつてメッセージ性を持つて動いていかなければいけないのではないか、と思います。

真田の歴史を活かした街づくりというのは、真田氏を契機に利用しながら、過去を知り、今を考え、未来をつくっていくことです。そのためにはぜひ皆さん、もう一度、足元を見つめ直し、自分たちの持っているエネルギーを自分たちのものにして爆発させていきましょう。

時間が来ましたので、これで終わらせていただきます。

どうもありがとうございました。